

浅井了意仮名草子とその周辺

著者	金 永昊
雑誌名	金沢大学大学院人間社会環境研究科博士論文要旨(論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨)
巻	平成22年6月
ページ	17-23
発行年	2010-06-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/32784

氏名	金永昊
生年月日	
本籍	
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	人博甲第7号
学位授与の日付	平成22年3月23日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第4条第1項）
学位授与の題目	浅井了意仮名草子とその周辺 (The Kanazoushi by Asai Ryoi, and its related problems)
論文審査委員	委員長 木越治 委員 西村聡、加藤和夫 大瀧幸子、上田望 高橋明彦（金沢美術工芸大学准教授）

学位論文要旨

本博士論文では、「浅井了意仮名草子とその周辺」というテーマの中で、特に了意の『三綱行実図』と『伽婢子』、そして了意の影響を受けた林義端の浮世草子『玉櫛笥』について考察したものである。

第一章 『三綱行実図』の伝播と浅井了意の翻訳

本章では、これまで未詳であった和刻本『三綱行実図』の底本及び和訳本の底本を明らかにしたうえで、出典との比較によって見えてくる了意の翻訳の世界を明らかにした。それに加えて、日本における『三綱行実図』の受容の諸相について考察した。

まず、『朝鮮王朝実録』の記録を中心に、朝鮮と日本における『三綱行実図』の出版の様相をまとめ、『三綱行実図』が朝鮮及び日本において、庶民を教化するために非常に重要な役割を果たしていたことを改めて確認した。

和刻本の作者については、従来は林羅山であろうという情報が知られていた。しかし、羅山による『三綱行実図』の烈女篇の翻訳『貞女和字記』と和刻本の訓点を比較した結果、その内容が甚だ異なり、これは両作品が別の人物によるものであるという証拠である。したがって、和刻本の作者における従来の説について再検討が必要であることを述べた。

和刻本の底本の場合、これまでは宣祖改訳本であろうというふうに漠然としか考えられてこなかったが、埋木による補修部分や異体字、字の一部が破損した部分まで忠実に覆刻本を作っていたことから、和刻本が底本としたのは、京都府立総合資料館所蔵本と同じ種類のものであったことを明らかにした。

次に、了意の訳文と、朝鮮刊本及び和刻本を比較検討したところ、了意の訳文に多くの誤訳が見られるのを発見し、その原因は和刻本の訓点の誤りを忠実に翻訳したために生まれたものであることを明らかにした。これによって了意が和訳に用いたのが朝鮮刊本ではなく、和刻本であることが判明した。

了意は、誤訳が生まれると、それをそのまま放置したのではなく、全体の内容における矛盾を避け、「孝子・忠臣・烈女の行実を褒め称える」という原話の意図を損なわないために、原話にはない内容を新たに追加したり、内容を変えることによって、内容に一貫性を保たせ

ていた。これによって、了意の訳文における改変及び誤訳の背景には和刻本の存在があったことが明らかになったのである。

次に、『新続列女伝』の場合、これまでの研究では『三綱行実図』との関係は未解決のまま残されていた。しかし、第一節で提示した『三綱行実図』の系統と種類をもとに再検討してみると、『新続列女伝』は、実は初刊本『三綱行実図』から55条を転載していることが判明した。その他、『大和小学』『賢女物語』の場合、初刊本『三綱行実図』からの直接な影響が認められ、『訓蒙故事要言』は和訳本『三綱行実図』を転載していたことを新たに指摘出来た。

最後に、『三綱行実図』の翻訳を通して、了意はいかなる孝子・忠臣・烈女観を提示したかが問題になっているが、了意は徹底的に分かり易さを追求する中で、主人公の孝・忠・烈の行為に「まことの心」が伴っていたことを高く評価し、強調していたのである。

第二章 アジア漢字文化圏の中の『伽婢子』

『伽婢子』は、これまで主に中国の『剪灯新話』との関連性を中心に研究が行われて来たのに対して、本章では、朝鮮の『金鰲新話』とベトナムの『伝奇漫録』も同じく『剪灯新話』の翻案によるものであることに着眼し、『剪灯新話』との比較だけでは明らかにならなかった『伽婢子』の特質について究明した。

巻六の第三話「遊女宮木野」の場合、宮木野の遊女としての人物造形及び彼女が孝行・貞節の徳によって転生するのは、従来は単なる「愛卿伝」の丸取りとして片付けられてきた。しかし、各国における遊女と貞節観を比較することによって、「遊女宮木野」には原話を忠実に翻案したが、そこには江戸時代の遊女に対する認識と貞節観が反映されていたことが分かった。

また、原話の転生譚について「遊女宮木野」だけが忠実に翻案し、再会と転生の期間を原話と同じく3年としたのは、『伽婢子』自体に転生の論理が存在していたからであり、だからこそ浅井了意だけが原話の転生譚に共感したのである。

現実認識とその解釈の場合、人間が経験する悲劇的な現実について、各翻案作品は同じく人知を超えた存在によるものであると考えていた。しかし、「遊女宮木野」が異なる点は、その悲劇の原因に対する洞察まで提示し、それが前世からの因果応報によるという仏教的な観点に基づいた現実認識が示されていたのである。

巻十二の第二話「幽霊書を父母につかはす」の場合、『金鰲新話』と『伝奇漫録』では、原話における「愛の成就」と「貞節」の対立を問題にし、貞節を守って殺される女性として改変したり、或いは女性の出自を遊女に変えていた。それに対して、「幽霊書を父母につかはす」で問題にしたのは、幽霊が両親に手紙を送って消息を伝えたということであり、純愛譚から親孝行譚へと主題を替えている。

了意が原話を親孝行譚として理解したのは、『孝行物語』『堪忍記』『大倭二十四孝』『三綱行実図』の「孝子図」などの著作から分かるように、彼は親孝行というテーマにもともと大きな関心を寄せていたからであると思われる。しかし、翻案の結果、原話は純愛譚として一貫しているのに対して、「幽霊書を父母につかはす」では、物語の前半部で語った純愛譚が後半部では意味を失ってしまい、主題が分裂してしまう結果をもたらしたのである。

巻四の第一話「地獄を見て蘇」の場合、本話は原話を忠実に翻案し、原話の意図をそのまま受け継ぎながら、その描写においては、分かり易く言い換えたり、繰り返すことによって内容を再び確かめたり、故事を引用して説明したりするなど、庶民を対象とする仮名草子の典型的な特徴が随所に現れていた。

この地獄譚を解釈するにおいて最も大事なものは、地獄経験が終わった後の主人公達の態度を

比較することであった。「地獄を見て蘇」が異なる点は、現実世界に戻された主人公が「儒学をすて」て仏教に帰依することで終わっていることである。これは、江戸初期の思想の転換期において、儒学者が仏教的世界の地獄を見て仏教に説教されたことを意味し、本話は仏教的な理念を伝える唱導物語としての『伽婢子』の創作意図がもっともよく現れた話である。

巻三の第三話「牡丹灯籠」の場合、男女の出会いの場面において、原話より叙情的な雰囲気の中で物語が展開され、やや過激な性的描写は穏健な描写に変わっている。

「牡丹灯記」の翻案において最も注目すべきところは、後半部分における道人の登場と妖怪退治のモチーフを、各翻案作品ではいかなる形で認識して翻案したかであろう。阮嶼と金時習は同じく原話を妖怪退治譚として理解していたが、これを念頭においたうえで、原話のほうを改めて読み直してみると、瞿佑もやはり原話を妖怪退治譚として描いていたのである。

それに対して、了意だけは「牡丹灯記」を恋愛譚として生まれ変わらせている。つまり、原話の「幽霊との交わり+妖怪退治」の物語を了意は「幽霊との恋愛+怪異」の物語として再構成したのである。このようなテーマの転換は、『奇異雑談集』や『幽霊之事』『霊怪艸』などの先行作品では見られないものである。江戸時代の日本人に「牡丹灯記」が歓迎され愛され続け、様々な形で「牡丹灯記」の追従作及び影響作が生まれたのは、了意が「牡丹灯籠」を平安時代の歌物語を彷彿させるような叙情的な怪異譚として翻案したからであろう。

怪異譚を素材としている『剪灯新話』がその序文で教訓的な意図を標榜しているにも係らず、中国では禁止され、朝鮮の歴史書では非難されている。それに対して、日本とベトナムでは歓迎された。その理由は、『伽婢子』の序文と『伝奇漫録』の評語から分かるように、両作品共に「怪力乱神」を「語」ることの禁忌を犯してはいるものの、人に教訓を与えるためなら、どんな思想や価値観であっても自由に利用するという作者の積極的な意図があったからであろう。

日本文学史の中で『伽婢子』が占める重要性については改めて言うまでもないが、日本の文学をアジア漢字文化圏という、より広い視野から眺めた時、『伽婢子』はこのうえない非常に良い材料なのである。

第三章 『玉櫛笥』の成立と性格

林義端は浅井了意の『狗張子』を出版し、『玉櫛笥』の自序では了意の作品を模倣して新たな作品を執筆したことを告白しているため、了意の作品との関連性が注目されている。

まず、了意は『狗張子』の自序で、その目的を「なぐさむ」としているのに対して、義端はその序文で啓蒙、勧善懲悪及び教訓を主眼とした作品とし、そうすることによって『伽婢子』の続篇として『伽婢子』と同じような意義を持たせようとしていた。義端が『玉櫛笥』について『狗張子』を受け継いだ作品であることを前面に打ち出しているのは、『剪灯新話』『剪灯余話』『伽婢子』『狗張子』の所謂『剪灯新話』系列の作品として高い評価を得ることを目的としていたからであろう。

『玉櫛笥』には和歌が29首収められているが、その出典について、原歌と完全に一致している歌は22首、一部を改作したが、出典として断定して良い歌は4首、類歌は2首、出典未詳の歌は1首であったことを指摘した。了意の場合、物語を構成するに当り、その場面にもっとも相応しい和歌を類題和歌集から探して挿入している。また、和歌の使い方を見ると、了意は半数以上の和歌について新たに創作したり、改作していた。それに対して、義端の場合、日本の物語をそのまま利用する中で、和歌までも丸取りする形を取り、原歌を変えないでほぼそのまま利用したものが多く見られた。

巻一の第一話「養老の滝」については、筆者がこれまで収集した養老の滝説話を提示し、

その系譜についてまとめたうえで、本話の構想において義端は『本朝故事因縁集』及び『養老寺縁起』から最も大きな影響を受けていたことを指摘した。つまり、義端は「靈龜2年→天正年中」の順で展開されている『本朝故事因縁集』の全体構造を逆転して、「天正年中→靈龜2年」の順で展開させ、天正年中のを中心にした全体的な肉付けは『養老寺縁起』に拠っていたのである。

『剪灯余話』が出典である話の場合、巻一の第二話「猿誦法花経」と巻三の第四話「松永弾正墮地獄」を例に新たな出典を提示し、それによって『玉櫛笥』執筆における義端の構想の一端について考察した。つまり、「猿誦法花経」の場合、これまでは『剪灯余話』巻一の第二話「聴経猿記」が出典として指摘されていた。本稿では、冒頭部分の雲浄法師説話と末尾の真空法師説話は、『元亨釈書』巻九「雲浄法師」に見える雲浄法師説話を2つに分けて、前半を雲浄法師説話に、後半を真空法師説話に割り当てたものであることを指摘した。

また、「松永弾正墮地獄」の場合、これまでは『剪灯余話』巻一の第四話「何思明遊鄴都録」が出典として挙げられていたが、地獄の描写及び苦しみを受けている罪人の姿には『伽婢子』巻四の第一話「地獄を見て蘇」及び『太平記』第二十「結城入道墮地獄事」の記述を忠実に利用したことを指摘した。

次に、『玉櫛笥』と歴史的史実の利用方法の場合、戦国動乱期を素材としている巻二の第二話「瞽者知三世」と巻三の第一話「畜生塚」を例に新たな出典を提示し、了意の歴史書利用の方法との違いについて考察した。「瞽者知三世」の場合、作者未詳の『万松院殿穴太記』のような、義端にとっては最近に刊行された歴史書を第一典拠とし、それらを縦横に利用していた。また、「畜生塚」の場合、これまでは『聚楽物語』が出典とされていたが、それに加えて『伽婢子』の「金閣寺の幽霊に契る」と「牡丹灯籠」、『剪灯新話』の「緑衣人伝」、『剪灯余話』の「江廟泥神記」、『將軍記』の内容も忠実に利用していることを指摘した。

了意は物語を構成するにあたって、中国の書物を第一典拠として、人物や場所及び時代を日本化しながら、『甲陽軍鑑』や『將軍記』などの通俗的な歴史書を第二典拠とし、小説形象においてあくまでも自分の文章として作り直して作品化していた。それに対して、義端は当代に流布していた歴史書の文章をそのまま丸取りし、長い文章は短くまとめるといった形で作品を構成していたのが相違点であると言えよう。

Abstract

This paper deals with the two works “Sankoukoujitsuzu” and “Otogibouko” by Asai Ryoi, a famous writer in the genre of Kanazoushi in the early modern period, and Hayashi Gitan’s horror story “Tamakushige” directly influenced by the former works.

The work “Sankoukoujitsuzu” is a Japanese version of the Chinese book of precepts originally published in Korea. It was thought that Ryoi used one of some wakokubons of the original when he translated it into Japanese, but the details of which one he used were not known.

First, this paper shows that the original wakokubon Ryoi used is the one at Kyoto Prefectural Library and Archives. Furthermore it points out that his Japanese translation was based on the kunten in the wakokubon and thus his book also contains some errors arising from the original kunten.

Next, concerning “Otogibouko”, the Japanese version of the Chinese novel “Sentoushinwa” in the Ming Dynasty, I draw out the peculiarities of its adaptation, comparing it with the other two versions: the Korean “Kingoushinwa”, and the Vietnamese

“Denkimanroku”.

Finally, regarding Hayashi Gitan’s “Tamakushige”, this study identifies its numerous sources, and refers to the attitudinal differences in adaptation between Ryoji and Gitan.

論文審査の結果の要旨

浅井了意は江戸時代初期、文学史的には仮名草子と総称される小説ジャンルを代表する作家である。彼の著わした三十余部に及ぶ仮名散文群には、古典の訓詁注釈・名所案内記・教訓書・中国小説の翻案等が含まれており、その多様さがそのまま仮名草子という小説ジャンルの特質を形成している。本業であった僧侶としても十五部余の仏書を著わしており、彼の著作活動の全貌は近年刊行が始まった全集によってようやく明らかになりつつあるところである。

本論文では、この浅井了意の作品から、代表作の一つとされる『伽婢子』、朝鮮で刊行された教訓書の翻案である『三綱行実図』の二作品を取り上げ、さらに、了意怪談の直接的な影響下に書かれた林義端の怪異小説『玉櫛笥』を取り上げ、それぞれについて克明かつ詳細に考証・論述したものである。

『伽婢子』に関しては、先学によって典拠探索等の基礎作業が積み重ねられており、現在は、作品の特質を奈辺に求めるかが大きな問題になっている。『伽婢子』の主要部分が明代中国で制作刊行された瞿佑作『剪燈新話』の翻案であることはつとに著名であり、その比較考証に関しても多くの先学による言及が備わる。氏は、同じ『剪燈新話』の翻案作である韓国の『金鰲新話』及びベトナムの『伝奇漫録』と比較することによりより新しい角度から了意の意図を探ろうと試みているが、特に注目されるのは、上田秋成等への影響という意味でも重要な意味を持つ「遊女宮城野」において、原話「愛卿伝」の末尾に置かれた転生譚をそのまま残したことに關する意味づけである。韓国・ベトナムの翻案作ではその部分を削除し、主人公の身分も原話のような遊女ではないとすることによって、女性が「貞節」を守って死んでいくというモチーフのみをクリアーに示そうとしている。これらとの比較することにより、了意が原話のまま遊女とし、かつ転生譚もそのまま残していることに関しては、より積極的な意図をみるべきではないかと金氏は主張する。すなわち、この作品には「貞節」以外のテーマ、端的にいつてしまえば、戦乱の中で死んだものへの「鎮魂」という意図が見てとれるのではないかというのが金氏の立場である。一般に、翻案作を論ずる場合、原話からの改変を通してその意図を推測するという方法をとることが多いが、金氏は、原話のままであることの積極的な意味を、韓国・ベトナムの翻案作との比較を通して取り出すことに成功しており、この点は、『伽婢子』の研究手法の面からも重要な成果であると評価することができる。

これに比すると、第二章・第三章の『三綱行実図』及び『玉櫛笥』に関する研究においては、書誌調査や典拠探索などの基礎的な研究に多くの作業が費やされている。『三綱行実図』に関しては、克明な書誌調査により、和刻本が利用したとおぼしき朝鮮刊本を特定したことがなによりも大きな手柄である。そのうえで、了意の翻案における誤りが和刻本の訓点の誤りに起因することを証明しており、その論旨はきわめて明快である。なお、本章は、平成22年1月刊行の日本近世文学学会機関誌『近世文藝』第91号に掲載されたことを附言しておく。

また、『伽婢子』の続編である『狗張子』を刊行した書肆文会堂が林義端の名で了意没後にそれらを手本として執筆刊行した『玉櫛笥』に関する研究においても、従来の典拠調査の不備をただし、あらたに多くの典拠を突き止めることに成功している。これらは、今後の研究の基礎となるべき貴重な作業であり、すみやかなる発表が期待される貴重な業績である。

論文全体としては、個別の作品研究はすぐれているものの、それらの研究を通して浮かびあがってくる浅井了意という作家像がそれほど明確になっていない点や、ともに怪異小説である『伽婢子』と『玉櫛笥』の比較検討が不十分であるという難点はあるものの、個々の作品研究のレベルがいずれも現在の研究水準を踏まえつつさらに多くのものを付け加えているという点で審査員全員から高い評価を得た。不足する部分は、今後の精進に期待する、とい

うことで、審査員全員合格と判断するに至ったものである。